

弘前市周辺（町村）の経済活動

— 尾上町の花弁・花木の販売について —

工藤雪枝

I はじめに

尾上町は弘前市から弘南黒石線で約20分の所である。田舎館村・黒石市・平賀町・弘前市に接した東西に細長い町で稲作中心の農業を主産業としている。尾上町で花卉・花木の販売を特色としてあげられる。花卉や花木の販売が行われるようになった背景を探り流通をとらえるのが目的である。資料が少ないため聞き取りをした。

II 花卉・花木の実態

花卉や花木の生産は一つの近郊農業としての性格をもった農業経営として注目されている。昭和25年から昭和46年までの全国の花木生産状況は作付面積も栽培農家数も急増している。

全国花木の作付面積と栽培農家数

年次	作付面積	栽培農家数
昭和25年	249ha	4,929戸
43年	3,727	22,587
45年	6,580	33,325
46年	8,410	42,510

尾上町で花卉・花木の販売が行われているので尾上町周辺では尾上町を花木生産地として評価している。尾上町では花卉生産はわずかになされているが花木生産は全く行われていない。生産地から花木を取り寄せて販売するといういわば中継地としての役割を果たしている。農業が主産業で農業生産は米とりんごを基幹としている尾上町において花木販売がどのような位置を占めているかという点、尾上町の粗生産額（昭和48年度）によれば米が7億4千万円、りんごが5億7百万円、野菜が7千7百万円、苗木が1千4百万円、肉豚1億7千4百万円、その他（花卉を含む）が1億1千2百万円、そして花木取り扱い金額が5億6千3百万円で、花木取り扱い金額は米に次いで多くりんごの粗生産額をすこしまわり花木販売は尾上町では重要な産業の一つになっている。花木販売の経営戸数（昭和48年度）は14戸で、土地利用面積は全部で600アールである。販売が目的であるため根廻しを行い移植しても枯れないようにする。この時多くの労力を必要としている。花卉生産戸数は10戸で栽培面積も120アールと少なく兼業である。切花が多く生産されきくが大部分を占め他にカーネーションが生産されている。鉢植類の栽培は少なく、シクラメンが主に栽培されている。鉢植類は生産するよりも販売する方がよいということで販売だけに転換したところもある。

花卉生産はわずかに行われているが花木生産が行われていないのは花木生産地に比べて気候条件

がよくないために経営的に不利なためであろう。

Ⅲ 流通について

尾上町の花木販売の特色はいわゆる売り子といわれている人たちによる振れ売りである。14戸の販売を行っているところでは卸商の形をとり生産者から直接花木を仕入れたり生産地の農協や植木業者から仕入れ、埼玉県・東京都・千葉県・神奈川県・四国地方・九州地方と多方面にわたって仕入れている。3月から4月にかけて花木をトラック輸送して10月まで売り子によって振れ売りされる。初めはかごを背負ったり自転車で振れ売りし販売地域も尾上町周辺の狭い範囲であったが現在では県内はもちろんこのと秋田県・岩手県・北海道方面まで拡大された。大規模に植木販売を行っているところでは造園も兼ねている。販売地域が拡大したのは振れ売りが行われていることもあり交通機関が発達し車が普及したからでもであろう。尾上町では花木の種類が豊富であるため数が少なく種類を多く仕入れることができることから他地域の造園業者からの注文も多い。

花卉は生産者が少ないので個人個人が直接出荷している。切花は7月から9月にかけて弘前青花市場と尾上町は青森市まで車で約1時間と近いので青森青花市場へ出荷している。生産している鉢植は11月から翌年の3月まで売り子らによって振れ売りがなされている。

Ⅳ 花木販売が行われるようになった背景

花木販売を行っている14戸がどのように分布しているかという点と15部落のうち南田中部落に8戸、李平部落に2戸、高木部落に2戸、新屋町部落に1戸、中佐渡部落に1戸と南田中部落に半数以上集まっている。南田中部落の特色をとらえて背景を探っていこうとする。

南田中部落はゴザやホーキを振れ売りする売り子が多い部落である。50年前前から材料を栃木県から仕入れて農閑期を利用して座敷ホーキがつくられているがホーキの需要が少なくなっている。100年前まではイグサが植えられて手織りでゴザがつくられていたが今では福岡県や岡山県から製品をそのまま仕入れて販売するだけになり、まだ古い家の寸法に合わせて加工するのが行われているだけである。しかしゴザの需要が少なくなり販売時期もお盆や正月近くに限定され他の期間は暇となるために花木販売も行きよようになった。どうしてこのようにゴザやホーキの販売が盛んであったのか耕地面積に注目してみる。

水田・普通畑・果樹畑を合わせた総面積では金屋部落がもっとも多い。南田中部落は1,398アールで他の部落と比べて少なくはない。それが1戸当たりの面積となると58アールと南田中部落はもっとも少ない。水田だけの面積は総面積が7,618アールと少なくはないが1戸当たりが39アールともっとも少ない。1戸当たりの面積が少ないことは農業戸数が多いことを示すことに

尾上町の耕地面積（昭和45年）

区分 部落名	水田 a		普通畑 a		果樹畑 a		計 a	
	総面積	1戸当	総面積	1戸当	総面積	1戸当	総面積	1戸当
金屋	12,229	58	1,810	8	7,584	36	21,623	103
南田中	7,618	39	815	4	2,963	15	11,398	58
李平	5,475	69	381	4	1,255	15	7,112	90
高木	7,716	54	388	2	1,168	8	9,273	65
尾上	3,417	63	343	6	494	9	4,256	78
新屋町	5,297	54	103	1	812	8	6,213	64
猿賀	13,908	64	1,017	4	4,330	19	19,256	88
中佐渡	4,344	76	210	3	760	13	5,315	93
長田	2,920	88	233	7	417	12	3,571	108
八幡崎	8,912	68	599	4	2,434	18	11,946	91
新山	4,457	74	172	2	589	9	5,281	86
蒲田	2,759	81	71	2	113	3	2,944	86
日沼	7,437	68	387	3	430	4	8,256	76
計	86,496	61	6,534	4	23,355	16	116,386	82

もなろう。南田中部落は耕地面積が少ないことからわかるように専業農家数が少なく第二種兼業農家数をもっとも多い部落である。耕地面積が少ないために分家しても耕地を分配されないこともある。そこでゴザやホーキの振れ売りを行なうようになり資本を蓄えたものがゴザの卸商となり花木販売もとり扱うようになったのである。

青森県はりんご生産地として知られりんご生産農家が多い。りんごの木が老齢化したり新しい品種のりんごをつくる時苗木を必要とする。この苗木販売を行っていたところで花木販売をとり扱うようになった。苗木は栽培しているものもあるが多くは新潟県や福島県からとり寄せて1～2年間育成した苗木を販売している。最近では苗木の栽培技術も向上し苗木を栽培する農家も増加し接ぎ木を行う農家も増えて苗木の需要が減少してきた。その上りんごの苗木の販売時期が10月～11月までで他の期間は暇となるので花木販売も行いようになった。

花木販売は55～56年前から行ったのがもっとも古く12～13年前から行った所が多い。今植木のブームがみられる。工場の排出物による公害がおこり自動車の排気ガスによって大気汚染が生じて街路樹を植えたり公園をつくって植木を植えている。また都市化が進み都市周辺に住宅地がつくられ庭園造りも盛んになっている。この植木のブームによって尾上町の花木販売が促進され発展してきたと思われる。

V 結 び

今まで述べたように尾上町では花木の生産は行われず販売だけが行われている。これからも気候条件が不利であるため販売だけが続けられるであろう。花卉はこれからも需要が増加していくであろうから尾上町でも生産体制を整えて花卉生産にもっと力を注いでいく必要がある。

参 考 文 献

尾上町要覧（昭和48年度）

植木生産の実際

緑化の新戦略